

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 1 日現在

機関番号：32651

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26350941

研究課題名(和文) しつけと虐待の境界に不安をもつ母親への支援研究

研究課題名(英文) Aspects of the boundary between discipline and abuse by mothers raising preschool age children

研究代表者

細坂 泰子 (Yasuko, Hososaka)

東京慈恵会医科大学・医学部・教授

研究者番号：90459644

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：しつけと虐待の境界に不安を持つ母親を対象にインタビューを行い、その境界の様相を明らかにした。その様相として特に【母親が感情的になると無意識に押し付けてしまう子どもへのパワー】、【子どもの属性で異なるしつけ】が抽出された。またこれらの結果を4コママンガを用いたパンフレットとして作成し、母親と育児支援者への活用を検討した。育児支援には特に感情や体験をイメージできる4コママンガのパンフレットが有効であり、感情や体験に焦点を当て教育媒体として活用することが有効であることが示唆された。

研究成果の概要(英文)：To analyze and clarify aspects of the boundary between discipline and abuse by mothers raising preschool age children based on analysis of narratives regarding parenting behaviors. Semi-structured interviews were conducted on 26 mothers raising preschool-age children focusing on the experiences they considered to reflect the boundary between discipline and abuse. Interview transcripts were qualitatively analyzed using a modified grounded theory approach. Categories reflecting aspects relating to the boundary between discipline and abuse were extracted as follows: "power to overwhelm the child unconsciously when their mother becomes emotional" and "differences in discipline depending on the attributes of the child". Additional categories included "superiority of other people's appraisal of discipline"; "accumulated fatigue from idealized images and responsibilities as a mother"; and "peace of mind to change according to surrounding support and mother's capabilities".

研究分野：母性看護学

キーワード：しつけ 虐待 境界 母親 育児支援 パンフレット

1. 研究開始当初の背景

児童虐待相談対応件数は、調査が始まった1990年から年々増加し続け、2012年には66,807件となった。増加し続ける児童虐待の問題に対処すべく、2000年には「児童虐待の防止等に関する法律」が制定され、2004年には同法を改正し、体制強化を図っている。しかし、現在も虐待死は毎年50人前後が報告され、相談件数も増加し続けており、解決には至っていない。

被虐待児のリスク因子として、未熟児や発達遅滞、気質等による育てにくさ(山田ら2009、高橋2008)が明らかになっている。また加害者は多くが実母であり、そのリスク要因として、核家族などの社会的要因、サポート欠如などの母親へのサポート要因、母親の精神的問題や未熟さなどの母親自身の要因(高橋2008, Norman 2012)があり、それらが複合的に存在することで虐待の発生につながる事が明らかになっている。

一方で、それらのリスクを早い段階で発見し、虐待発生を防ぐための、地域や産科施設での連携(大友2013)やリスク要因発見のためのツールや尺度の開発も研究が進んでいる。尺度は日本版エジンバラ産後うつ病自己評価表の活用(岡野1996)や、育児ストレス尺度(手島2003、清水2010)、潜在的児童虐待リスクスクリーニング尺度(花田2007)などが開発されている。

一方で、臨床や保健事業の中で“しつけ”という言葉の中に隠れた虐待を疑う事例に出会うことが少なくない。どのような行動が“しつけ”とみなされ、どこから“虐待”とみなされるのかについて、1029名を分析した先行研究(細井2013)では、「暴力群」の項目でかなり回答が分散し、母親自身が判断のつきにくい、曖昧な部分であることが明らかとなった。また母親の多くが自分たちの子育てについて“しつけ”なのか“虐待”なのか、多く悩みが寄せられているとの現状があり(金谷2006)、それらが虐待相談対応件数の増加につながっている可能性が考えられている。明らかに虐待と分かる行為であれば、他者の視点が入ることでそれが阻止できることも多いが、そうでない、しつけか虐待か、あいまいな部分で、加害者である家族も、被害者である子どもも犠牲を強いられているのであれば、それらを質的に明らかにする必要がある。

本研究では、研究1として、乳幼児を養育している母親に対し、しつけと虐待の境界について、物語られる育児行動に着目して分析し、明らかにすることを目的とする。同時に、これらの結果は育児を行うすべての母親に広く周知する必要がある。そのため、効果的なパンフレットを作成する。研究2として、まずは研究1の結果から仮パンフレットを作成し、対象となる学童前児童を養育する母親を対象に、自記式質問紙によるパンフレットの評価を行い、最終的なパンフレットを作

成する。

2. 研究の目的

本研究における研究1では、乳幼児を養育する母親が、子どもへのどのような養育行動をしつけもしくは虐待と認知するのか、物語られる育児行動の境界を記述することで、育児不安をおこす養育行動を明らかにすることを目的とした。

研究2では、しつけと虐待に関する知識の普及と対応を描写した4コママンガのパンフレットを第1研究から作製し、このパンフレットが母親および母親の支援者の知覚にどう反映され、育児支援につながるかを検討することを目的とした。

3. 研究の方法

研究1

質的記述的研究デザイン

乳幼児を養育する母親26名を対象に、インタビューを行い、母親の物語としての文脈の中から明らかになった、しつけと虐待の境界に関連した部分を識別して、内容の変化ごとに、カテゴリーを生成し、相互の関連性を踏まえながら、母親の個別的な体験としてのしつけと虐待の境界を「体験の本質」として統合した。

第2研究

無記名自記式質問紙を用いた質的内容分析研究デザイン

研究1で明らかになった21の概念を四コママンガを用いてパンフレットにし、乳幼児を養育する母親16名と母親の支援者10名を対象にパンフレットと自記式質問紙を同封し、回答はNVivo11を用いた質的内容分析を行った。

4. 研究成果

研究1

母親は日頃の育児行動の中で感情の押し付けと捉えられる状況や子どもの属性によって、しつけと虐待の境界へ変容すると知覚し葛藤する母親が多く、【母親が感情的になると無意識に押し付けてしまう子どもへのパワー】と【子どもの属性で異なるしつけ】の両カテゴリーが特にその葛藤の様相を生み出していた。この二つのカテゴリーは境界から虐待寄りに位置づけられた。母親は【しつけに対する他者評価の優位性】を重視するあまり、【理想の母親像や母親としての責任感から蓄積する疲弊】を経験していた。これら二つのカテゴリーは前述した境界から虐待寄りの二つのカテゴリーと相互に影響していた。また母親の育児行動の基盤として【周囲の支援や母親自身の力によって変化する心の余裕】が抽出された。このカテゴリーは母親自身が持つサポートや能力の有無が、しつけが虐待へ移行するかどうかの変化を生み出すことからすべてのカテゴリーに影響し、しつけにも虐待にもなりうる育児行

動全体に影響を及ぼしていた。

しつけと虐待の境界の様相では、感情優位となった時に子どもへのパワーが生じること、境界は子どもの属性で異なることが明らかになった。母親は他者評価を重視し、理想や責任感から疲弊していた。また母親の余裕はサポートや母親自身の力によって左右された。感情のコントロール法や知識の提供、母親への評価的サポート、コミュニティ拡大への支援、有効な社会資源の提供が示唆された。

表 1 しつけと虐待の境界を校正するカテゴリーとその内容

カテゴリー	概念
母親が感情的になると無意識に押し付けてしまう子どもへのパワー	感情優位で生じる不条理なしつけ
	大人の権力でねじ伏せられる子ども
	しつけの良し悪しへの葛藤
子どもの属性で異なるしつけ	発達によって変化する境界
	二人目の負荷と達観
	性差で異なる育児方針
しつけに対する他者評価の優位性	他者へのアピールとしてのしつけ
	理想の母親であるべしという承認欲求
	泣かせちゃいけないプレッシャー
	他の子と比べることで陥る苛立ち 周囲に見る素敵ママから受ける焦燥感
理想の母親像や母親としての責任感から蓄積する疲弊	母親の育児責任の重さに対する不安と焦り
	答えのない育児の中でもがき続ける母親
	子どもを預けることへの罪悪感
	溢れる情報に翻弄される 365日続く育児に疲弊する母親
周囲の支援や母親自身の力によって変化する心の余裕	精神的・物理的支援に比例する母親の安定力
	子どもでつながるママ友に感じる支えとストレス
	頼りになる専門家の知識と情報
	育児中の孤独感の切羽詰まった辛さ
	虐待をする母親と紙一重の怖さ

研究 2

母親の自由記述から【しつけと虐待の境界への理解】【育児経験への共感】【母親を取り巻く環境と支援の重要性】【今後に望む育児支援】の4つのカテゴリーが抽出された(表1)【しつけと虐待の境界への理解】では、4つのサブカテゴリーが抽出され、4コママンガのパンフレットからどのような時にしつけが虐待にリンクしやすいかを認識・理解したことが明らかになった。【育児経験への共感】では4つのサブカテゴリーが抽出され、知識だけでなく感情や体験に特化した育児経験の認識・理解が深まったことが明らかになった。【母親を取り巻く環境と支援の重要性】では2つのサブカテゴリーが抽出され、母親の孤独が育児に影響を与える状況などへの認識が深まっていた。【今後に望む育児支援】では4コママンガに対する要望として具体的な提示の必要性を認識していた。母親が記入した単語を Nvivo の頻出語クエリで検索した結果、もっとも多い単語は“子ども”であり、次が“自分”だった。

出され、母親の孤独が育児に影響を与える状況などへの認識が深まっていた。【今後に望む育児支援】では4コママンガに対する要望として具体的な提示の必要性を認識していた。母親が記入した単語を Nvivo の頻出語クエリで検索した結果、もっとも多い単語は“子ども”であり、次が“自分”だった。



図 1 母親の頻出語クエリ

支援者からは【妻に対する理解といたわりの知覚】【責任を自覚しつつ育児を遠巻きに眺める】【今後に望む育児支援】の3つのカテゴリーが抽出された(表1)【妻に対する理解といたわりの知覚】では2つのサブカテゴリーが抽出され、妻に対するサポートの必要性の認識が深まっていた。【責任を自覚しつつ育児を遠巻きに眺める】では、当事者意識が母親に比べて薄いことが明らかになった。【今後に望む育児支援】では父親としての育児役割への認識と共に、父親自身の働き方を改善する必要性への認識の深まりが明らかになった。支援者が記入した単語の頻出語クエリは、もっとも多い単語が母親と同じく“子ども”であったが、次に多い単語は“母親”であった。



図 2 支援者の頻出語クエリ

母親と支援者は特に感情や体験をイメージできる4コママンガのパンフレットが有効であることが明らかになった。一方で知識や情報だけを与えても印象には残らず、今後は感情や体験に焦点を当てた、視覚で訴えることのできる4コママンガの活用が有効であることが示唆された。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に

は下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

細坂泰子、茅島江子 乳幼児を養育する母親
のしつけと虐待の境界の様相．日本看護科学
会誌、査読あり、37巻、2017、1-9

〔学会発表〕(計1件)

Yasuko Hososaka, Kimiko Kayashima.
UTILIZATION OF FOUR-FRAME COMIC MANGA
IN CHILDCARE SUPPORT IN JAPAN:
FOCUSING ON THE BOUNDARY BETWEEN
DISCIPLINE AND ABUSE. 16th WAIMH イタ
リア 29/5/2018

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

細坂 泰子 (HOSOSAKA, Yasuko)
東京慈恵会医科大学・医学部・教授
研究者番号：90459644

(2)研究分担者

茅島 江子 (KAYASHIMA, Kimiko)
秀明大学・看護学部看護学科・教授
研究者番号：70125920

(3)連携研究者

該当なし

(4)研究協力者

該当なし